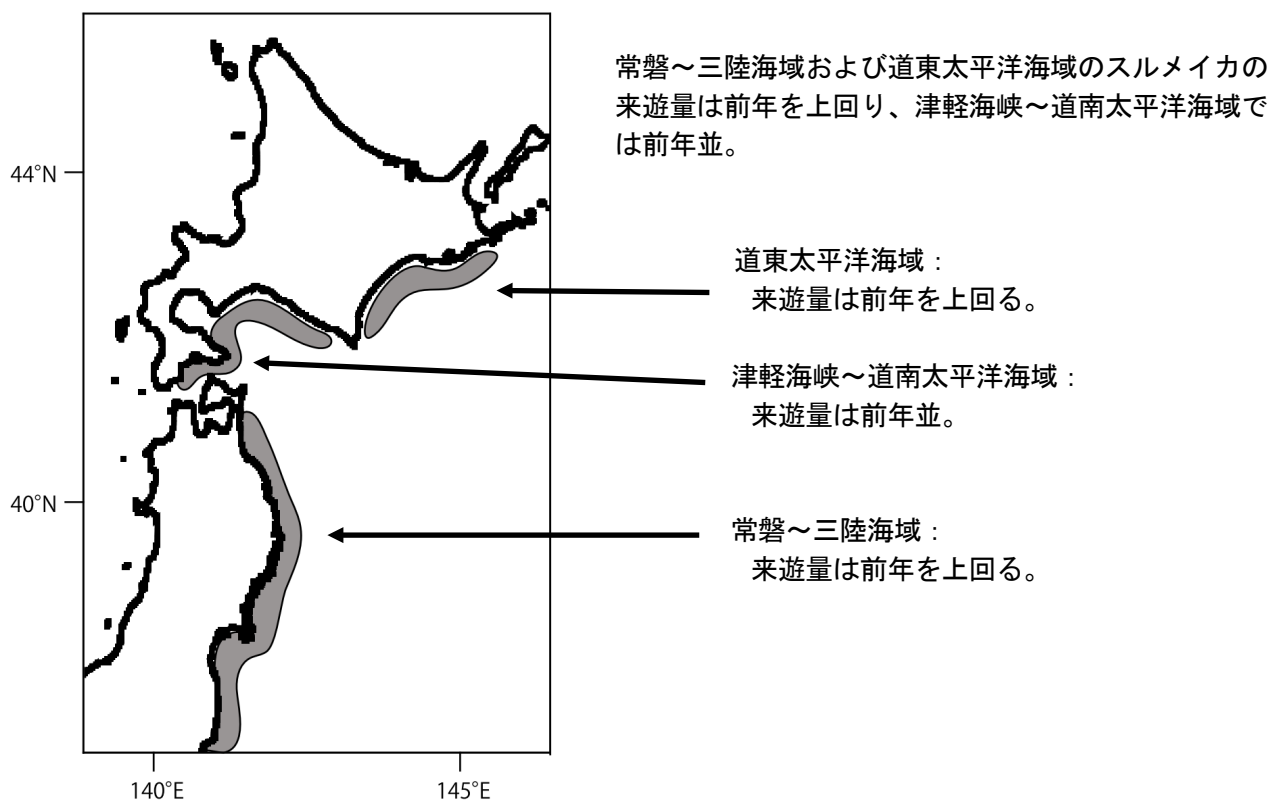


2025年7月31日
国立研究開発法人 水産研究・教育機構

2025年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2025年8月～9月)のポイント



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構
担当：浮魚資源部（横浜）大島、松井
電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001
当資料のホームページ掲載先URL
<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

2025 年度 第 1 回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2025年8月～9月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域

対象漁業：小型いか釣り、底びき網、定置網、まき網

対象魚群：冬季発生系群（2025年級群）

1. 常磐～三陸海域（小型いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

- （1）来遊量：前年を上回る。
- （2）漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。

2. 津軽海峡～道南太平洋海域（小型いか釣り、定置網）

- （1）来遊量：前年並。
- （2）漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。

3. 道東太平洋海域（小型いか釣り、底びき網）

- （1）来遊量：前年を上回る。
- （2）漁期・漁場：漁場形成は散発的で、明瞭な主漁期は無い。

I 予報の説明

2025 年 5 月下旬～7 月上旬に実施した太平洋及び日本海のスルメイカ漁場一斉調査と日本海スルメイカ北上期調査¹⁾の結果（図 1～3、以降、上記調査をいか釣り調査と総称する）、および 5 月～7 月の太平洋沿岸各地の漁況の経過（表 1）を主要な情報として 8 月～9 月のスルメイカの来遊量を予測した。その結果、以下の通り、常磐～三陸海域および道東太平洋海域は前年を上回り、津軽海峡～道南太平洋海域では前年並と予測される。なお、前年 8 月～9 月の漁獲量は、常磐～三陸海域では近年 5 年（2020 年～2024 年）平均を上回り、津軽海峡～道南太平洋海域と道東太平洋海域では近年 5 年平均を下回った。

¹⁾ 北海道立総合研究機構函館水産試験場が独自に実施。

1. 常磐～三陸海域（小型いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沿岸域を北上する群れを主体に、日本海を北上し津軽海峡を經由して来遊する群れが一部含まれると考えられる。三陸周辺海域（41° N 以南、143° E 以西）におけるいか釣り調査は、前年同様漁獲が無かった。各地域における 5 月～6 月（一部 7 月上旬²⁻⁴⁾）の漁法別の水揚げ量は、前年を上回った地域と下回った地域があったが（表 1）、常磐～三陸海域全体の水揚げ量は前年を上回った。以上のことから、太平洋沿岸域を北上する群れの来遊量は前年を上回ると予測される。6 月中旬～7 月上旬に日本海の津軽海峡西口周辺海域（39° N～42° N、138° E～140° E）で実施されたいか釣り調査での CPUE（いか釣り機 1 台 1 時間当たり漁獲尾数、スルメイカの分布密度を示す）は前年を下回った。したがって、日本海を北上し津軽海峡を經由して来遊する群れの来遊量は前年を下回ると予測されるが、本海域の漁獲対象資源は太平洋沿岸域を北上する群れが主体と考えられることから、常磐～三陸海域への来遊量は前年を上回ると予測される（前年の漁獲量は近年 5 年平均を上回った）。

²⁾ 漁業情報サービスセンターによるスルメイカ市況情報を基に集計。

³⁾ 岩手大漁ナビ（<https://www.suigi.pref.iwate.jp/>）による市況データを基に集計。

⁴⁾ みやぎ水産 NAVI（https://suisan-navi.pref.miyagi.jp/mizuage_top）による水揚げデータを基に集計。

2. 津軽海峡～道南太平洋海域（小型いか釣り、定置網）

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沿岸域を北上する群れと日本海を北上し津軽海峡を經由して来遊する群れが含まれると考えられる。津軽海峡東口周辺海域（41° N 以北、143° E 以西）におけるいか釣り調査は前年同様漁獲が無かった。6 月に函館港に水揚げした小型いか釣り漁船の CPUE（1 日 1 隻当たり漁獲量）は前年を下回ったが、7 月上旬に水揚げした小型いか釣り漁船の CPUE は前年並であった。一方、「1. 常磐～三陸海域」で記述した通り、太平洋沿岸域を北上する群れの来遊量は前年を上回り、日本海を北上し津軽海峡を經由して来遊する群れの来遊量は前年を下回ると予測される。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋海域への来遊量は前年並と予測される（前年の漁獲量は近年 5 年平均を下回った）。

3. 道東太平洋海域（小型いか釣り、底びき網）

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沖合域を北上する群れと考えられる。沖合域（143° E 以東）におけるいか釣り調査 CPUE は前年を上回ったことから、道東太平洋海域へのスルメイカの来遊量は前年を上回ると予測される（前年の漁獲量は近年 5 年平均を下回った）。親潮第 1 分枝の南限は平年並～やや北偏で推移し⁵⁾、釧路以西の道東沿岸域の水温は前年より高くなると予測されている（図 4、水産研究・教育機構の海況予測システム FRA-ROMSII⁶⁾）。このことから、道東沿岸域への来遊は前年より早くなると考えられるが、調査 CPUE は過去の推移の中でも低い水準にあることから、漁場形成は散発的で明瞭な主漁期はないと予測される。

⁵⁾ 2025 年度第 3 回東北海区海況予報（https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/pr2025/fri_20250729_tohoku-3rd.html）

- 6) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構により開発され、2022年3月より運用を開始した海況予測システム (<https://fra-roms.fra.go.jp/fra-roms/index.html>)

II 調査結果

1. 太平洋第1次スルメイカ漁場一斉調査

太平洋におけるスルメイカの分布状況を、太平洋側の4道県および水産研究・教育機構による調査船でのいか釣り調査（5月下旬～7月上旬に実施）によって調べた（図1）。全49調査点のうち有漁点は4点であり（前年は全56調査点のうち有漁点は2点）、調査海域全体の有漁点割合は前年を上回った（本年8%、前年4%）。調査海域全体の平均CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は0.01尾と前年を上回ったものの（前年は0.001尾）、極めて低い水準で推移した（図1、2）。海域別にみると、三陸周辺海域と津軽海峡～道南太平洋海域は前年同様漁獲がなかった。沖合域の平均CPUEは0.02尾と前年を上回った（前年0.002尾）。

いか釣り調査で採集されたスルメイカの外套背長組成を図3に示した。沖合域の漁獲物の外套背長組成は9～13cmに分布し、最頻値が10cmにあった。なお、前年は沖合域で10cmと14cmのスルメイカが1尾ずつ漁獲された（図3）。

2. 日本海スルメイカ漁場一斉調査（2025年度第1回日本海スルメイカ長期漁況予報の結果より引用・改編）

6月中旬～7月上旬に津軽海峡西口周辺海域（39°N～42°N、138°E～140°E）で実施されたいか釣り調査の結果、平均CPUEは0.01尾であり、前年（0.14尾）を下回った。

3. 移行域幼稚魚調査（参考情報として掲載）

5月上旬～6月上旬に常磐～三陸沖の太平洋で実施された表層トロールネットによる調査の結果、外套背長10cm未満のスルメイカの幾何平均CPUE（30分曳網当たり漁獲尾数）は2.3尾で、前年（0.4尾）を上回った（図5）。また、全調査点のうち有漁点の割合は29%であり、前年（15%）を上回った。漁獲物の外套背長組成は3～4cmの割合が高く、前年（2～4cm）並であった（図6）。以上の結果は参考情報ではあるが、CPUEは前年を上回っており、本予報期間後半に沖合から漁場への来遊量が前年より多くなる可能性を示している。

III 各海域の漁況の経過

2007年～2015年の太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）における年間漁獲量¹⁾は7万～16万トンで推移していたが、2016年以降大きく減少し、2024年は1.3万トンであった（図7）。主漁場は常磐以北の太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域および道東太平洋海域に区分される。太平洋海域での2024年8月～9月の漁獲量（生鮮）は6.3千トンであり、そのうち常磐～三陸海域では6.1千トン、津軽海峡～道南太平洋海域では173トン、道東太平洋海域では30トンであった（図8）。近年5年（2020年～2024年）平均との比は、常磐～三陸海域では130%、津軽海峡～道南太平洋海域では21%、道東太平洋海域では11%であった。なお、根室海峡～オホーツク海と千葉県以南の海域の漁獲量はそれぞれ0トンと14トンであった。

2025年6月までの各海域の月別漁獲量を図8に示した。2025年5月～6月の太平洋沿岸主要港での水揚量²⁾（生鮮：速報値、一部未集計）は1001トンで、前年（476トン）を上回った。常磐～三陸海域の主要港では864トンで、前年（447トン）を上回った。津軽海峡～道南太平洋海域の主要港では4トンで、前年（13トン）を下回った。千葉県以南では133トンで、前年（15トン）を上回った。なお、参画道県における代表的な漁況経過を表1に示した。

- ¹⁾ 主要港漁獲量を漁業・養殖業生産統計年報の値で引き延ばしているため図 7、図 8 を含めた漁獲量は全て推定値。
- ²⁾ 水揚量は単純積み上げた数値。

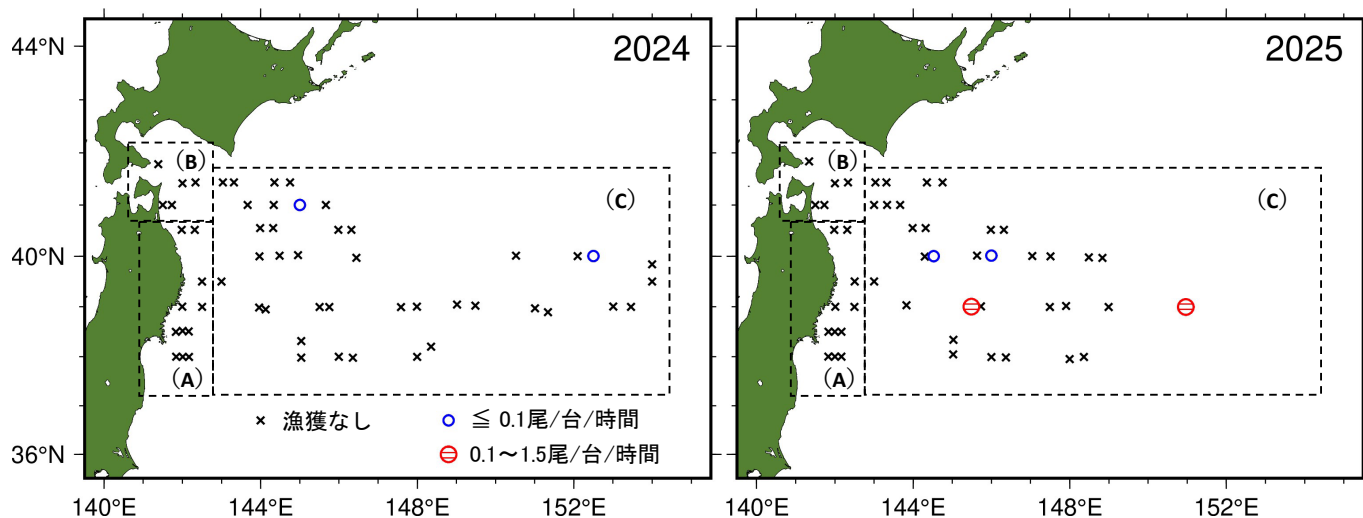


図1. 2024年、2025年5月下旬～7月上旬の太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布

⊖は0.1～1.5尾/台/時間、○は0.1尾/台/時間以下の有漁点、×は漁獲無しを表す。

破線で囲まれた海域は（A）三陸周辺海域、（B）津軽海峡～道南太平洋海域、（C）沖合域を示す。

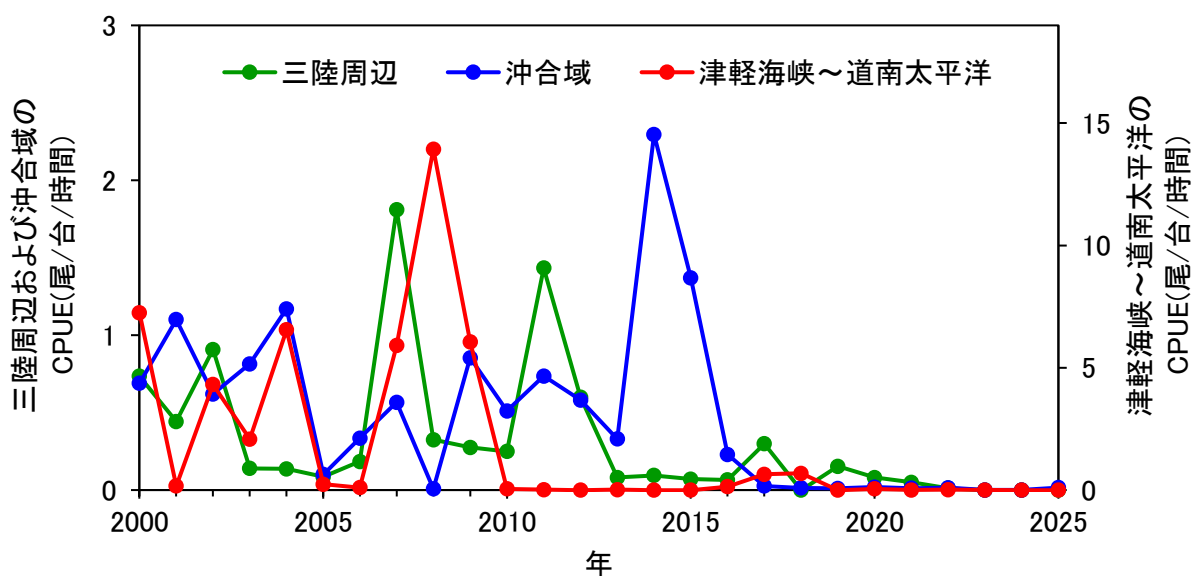


図2. 太平洋におけるいか釣り調査による海域別CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の年推移

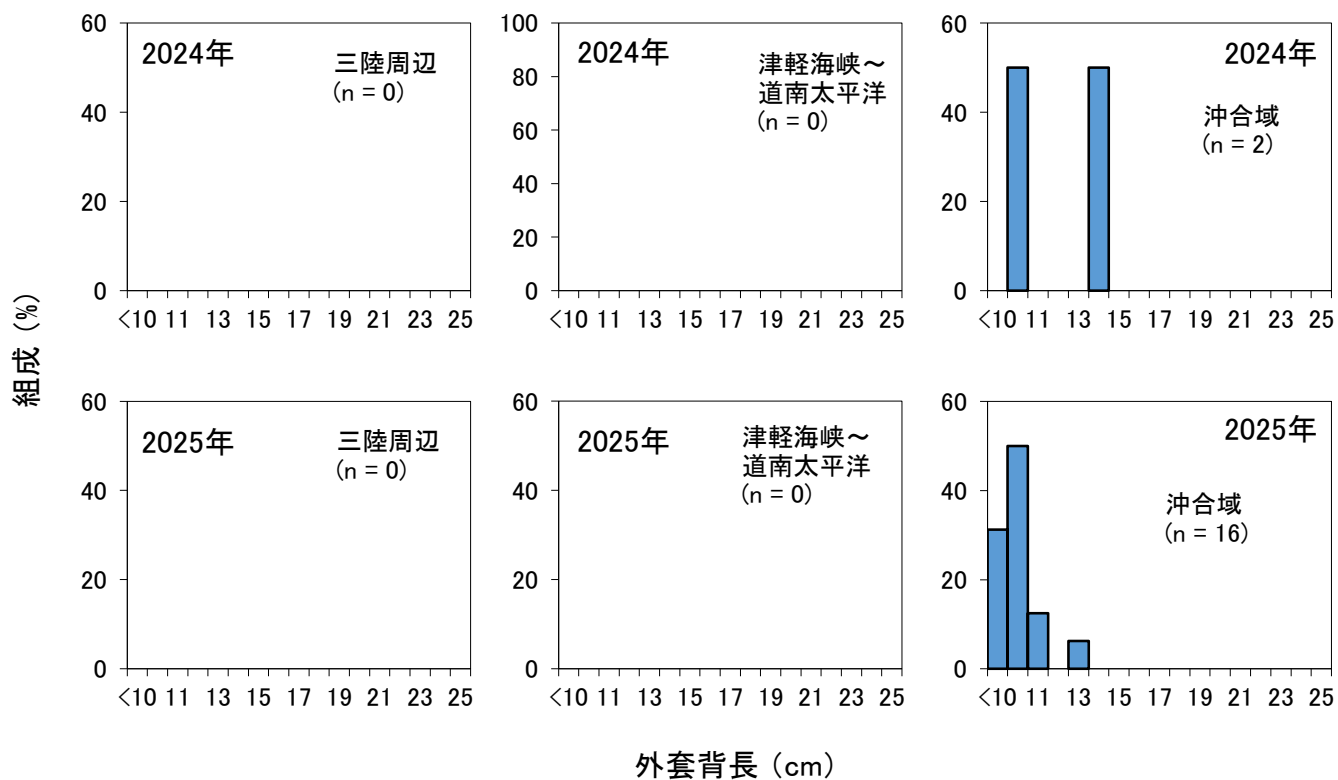


図3. 太平洋におけるいか釣り調査（三陸周辺海域・津軽海峡～道南太平洋海域・沖合域）で採集されたスルメイカの外套背長組成
各調査点の組成をCPUEで重み付け平均した後に全体の組成を作成している。
図中のnは測定尾数を示す。

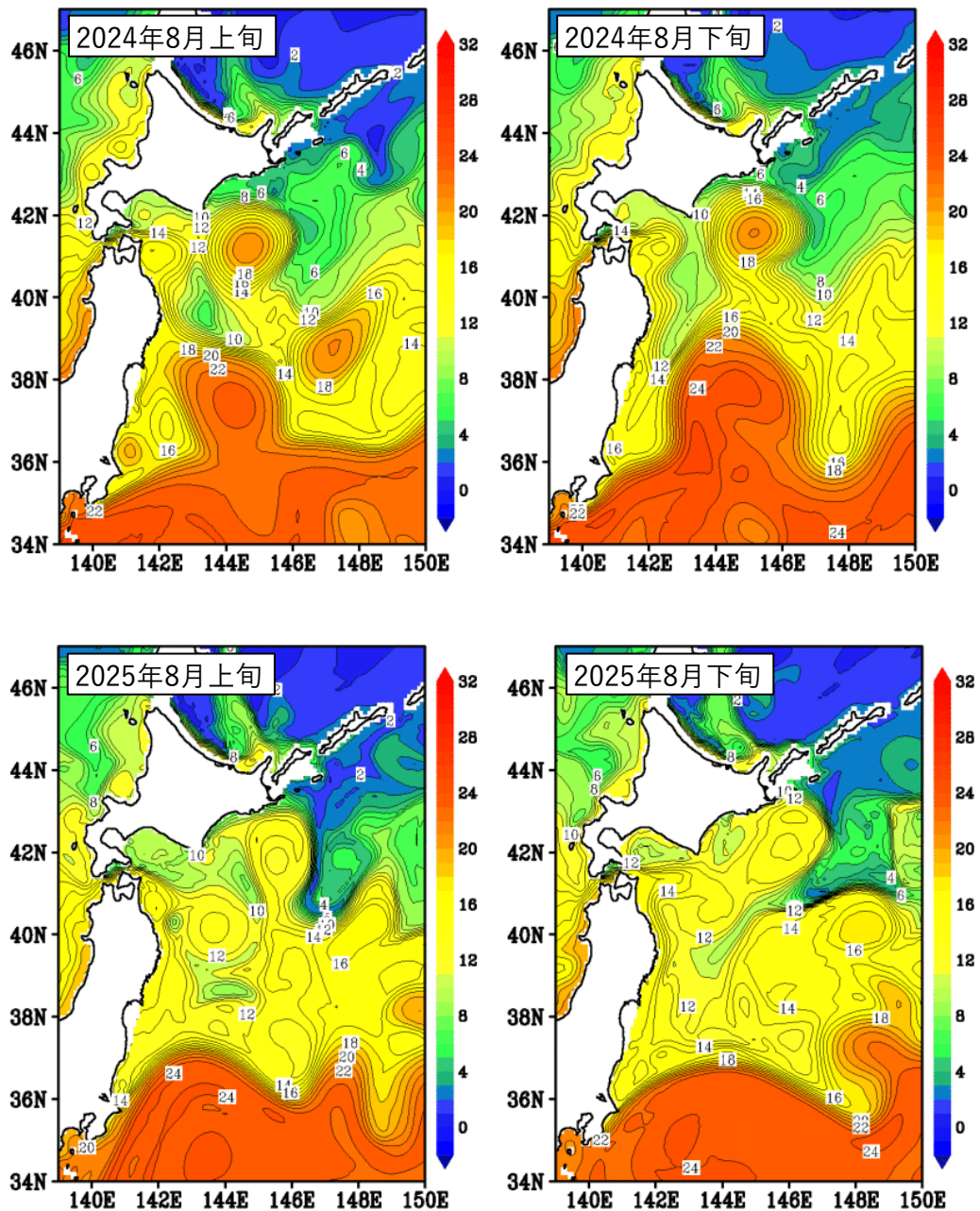


図4. 海況予測システムFRA-ROMSIIによる2024年、2025年の8月上旬と下旬の深度50mにおける水温

2025年は予測水温であり、2025年7月23日にHPより取得した。

深度50mはスルメイカの代表的な分布深度。

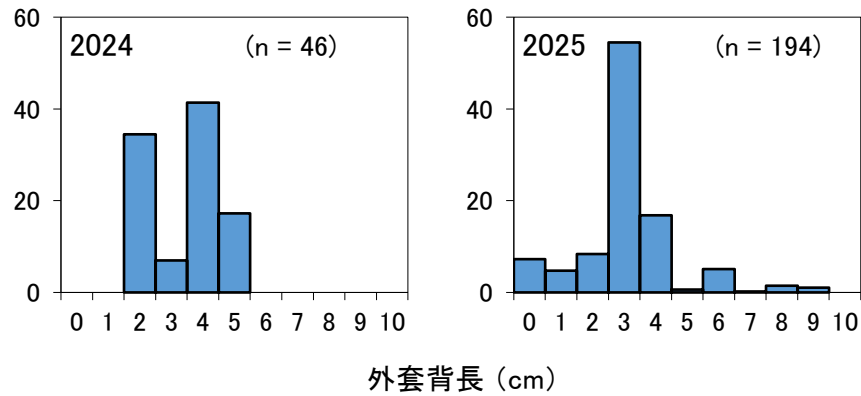


図6. 2024年、2025年5月上旬～6月上旬の太平洋における表層トロールネット移行域幼稚魚調査で採集されたスルメイカの外套背長組成
図中のnは測定尾数を示す。

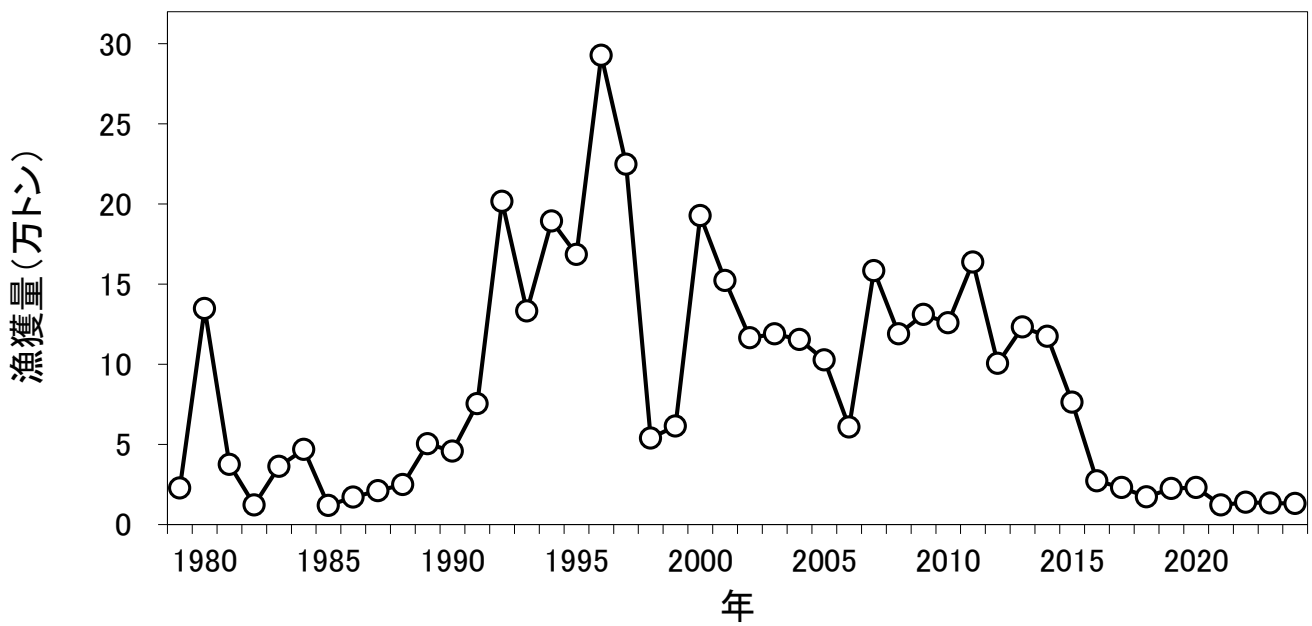


図7. 太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）におけるスルメイカの漁獲量（全漁業の暦年集計）の年推移

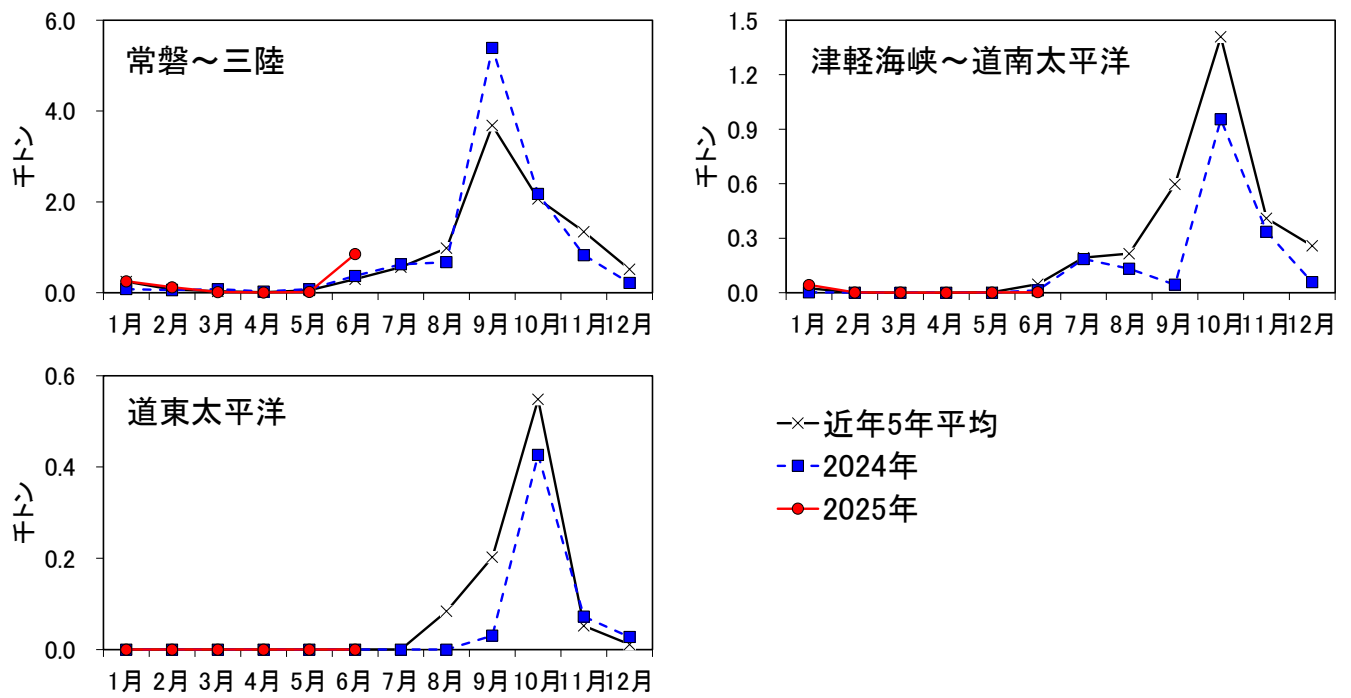


図8. スルメイカの月別海域別の漁獲量（生鮮）
 近年5年平均は2020年～2024年の平均
 （小型いか釣り・底びき網・定置網・まき網）

表1. 漁況経過（2025年5月～7月、一部未集計・暫定データ含む）

	漁況経過
北海道 道東	7月23日の時点で初水揚げはまだない（前年は9月14日に釧路で底びきによる初水揚げがあった）。
北海道 道南	6月の函館港への釣りによる水揚量は1.6トンであった（前年は7.4トン）。CPUEは前年比41%であった。また、漁業情報サービスセンターのスルメイカ市況情報によると、7月上旬の釣りによる水揚量は6.1トン（前年は6.6トン）、CPUEは前年比99%であった。
青森	6月の白糠港への釣りによる水揚量は8.2トン（前年は11.9トン）、CPUEは前年比82%であった。6月の大畑港への釣りによる水揚げはなかった（前年は25 kg）。6月の八戸港への釣りによる水揚げはなかった（前年は160 kg）。6月の八戸港への底びき網による水揚量は40.7トンであった（前年は45.3トン）。
岩手	6月の主要7港への釣りによる水揚量は47 kgであった（前年は558 kg）。底びき網による水揚量は135 kg（前年は38 kg）、定置網による水揚量は30.1トンであった（前年は63.3トン）。いわて大漁ナビの市況データによると、7月上旬の釣りによる水揚量は19.4トン（前年は6.2トン）、定置網による水揚量は9.3トン（前年は24.1トン）であった。
宮城	6月の主要10港への底びき網による水揚量は539.8トンであった（前年は163.5トン）。定置網による水揚量は24.5トンであった（前年は14.4トン）。釣りによる水揚げはなかった（前年は水揚げなし）。また、みやぎ水産NAVIの水揚げデータによると、7月上旬の石巻港への底びき網による水揚量は122.1トンであった（前年は41.7トン）。
福島	5月～6月の主要4港への沖合底びき網による水揚量は64.3トン（前年は16.8トン）、小型底びき網による水揚量は5.7トンであった（前年は1.0トン）。
茨城	5月～6月の主要4港への沖合底びき網による水揚量は1.7トン（前年は1.0トン）、小型底びき網による水揚量は4.7トンであった（前年は0.9トン）。
千葉	5月～6月の主要3港への定置網による水揚量は9.2トン（前年は3.9トン）であった。
神奈川	5月～6月の主要2港への定置網による水揚量は1.9トンであった（前年は9 kg）。
静岡	5月～6月の仁科浜港への釣りによる水揚量は1.7トンであった（前年は0.1トン）。
三重	5月～6月の奈屋浦港への中型まき網による水揚量は3.4トン（前年は0.1トン）、主要2港への定置網による水揚量は0.9トンであった（前年は0.2トン）。
和歌山	5月～6月のすさみ港への釣りによる水揚げは6.9トンであった（前年は水揚げ無し）。
高知	5月～6月の主要2港への定置網による水揚げは46.4トンであった（前年は5.7トン）。

注：CPUEは1日1隻当たりの漁獲量

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	静岡県水産・海洋技術研究所
	三重県水産研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県水産試験場
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
福島県水産資源研究所	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
茨城県水産試験場	
千葉県水産総合研究センター	
神奈川県水産技術センター	